

## 平成27年度 国語 (50分)

## 注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけない。
- 2 この問題冊子は23ページである。  
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始の合図前に、監督者の指示に従って、解答用紙の該当欄に以下の内容をそれぞれ正しく記入し、マークすること。
  - ・①氏名欄  
氏名を記入すること。
  - ・②受験番号、③生年月日、④受験地欄  
受験番号、生年月日を記入し、さらにマーク欄に受験番号(数字)、生年月日(年号・数字)、受験地をマークすること。
- 4 受験番号、生年月日、受験地が正しくマークされていない場合は、採点できないことがある。
- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークすること。例えば、

10
----

と表示のある解答番号に対して②と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の②にマークすること。

(例)

解答 番号	解 答 欄				
10	①	②	③	④	⑤

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってよい。

1

次の文章を読んで、後の問1～問4に答えよ。

まだ駆け出しの声優「ぼく(結城勇樹)」はテレビアニメーション「センターライン」に柴犬サブ役でレギュラー出演している。柴犬サブは胡桃沢高校野球部マネージャーの愛犬で、犬の視点で様々な角度から物語を俯瞰する役である。この日は「ぼく」が「お当番」の回で、たくさんセリフがあり主人公のようになる日である。そのうえ「ぼく」は、高校野球の名門、千原実業高校の投手「獅童春風」という重要なゲストキャラも担当する。前半のAパートの収録を終え、音響監督からリテイク(修正して再収録すること)の指示が出た。

音響監督はぼくの方にサングラスのレンズを向けてから、ブース全体を見渡すように顔を動かした。<sup>(注2)</sup>

「ええっと、今のパートは、結城の演技が基本線だ。むしろ、そっちに合わせる。椎野、平川、日向、友坂、大島。この五人。すまんが、もうワンテイクほしい」

最初は、意味が分からなかった。

じわーっと浸透してくるにつれて、ぼくは異様な雰囲気に気づいた。

みんな、目の色が変わっている。劇画調のアニメのキャラみたいで、目の中にキラリと光る炎がある。

それもそのはずだ、リテイクはぼくだと思っていたのに、そうではなかった。

椎野さんも、平川先輩も、日向さんも、友坂さんも……それに大島啓吾まで！ つまり、レギュラー陣全員だ。

椎野さんの目がぼくを見た。

いや、ぼくを通り過ぎて、音響監督のところまで止まった。ぼくのことなど、眼中にない。

「はい！ やります」と平川先輩が真っ先に言い、「わかりました」と椎野さんが続いた。

「今までやってきて、レギュラー陣どうしの間合いつてのがだいたい決まってきたるだろ。それをいったん忘れてもらって、今回は結城の演技を立てる。おまえらだから、あえて頼む」

音響監督がブースを去ると、平川先輩が言った。

「間合いだつてさ。なら、話しあつておいた方がいいか」

すると、自然と一箇所視線が集まった。

「大島さん！」と椎野さんが鋭い声を出した。

「こういうの大島さんは得意ですよね！」

ぼくは息を詰めて大島啓吾を見た。ピンクのリネンシャツのきゅつと絞った輪郭<sup>(ア)</sup>が光って見えた。いつも俯瞰してものを見ている彼は、時々、文字通り現場で「浮く」けれど、演技においてはすごく信頼されている。

「こういう場合——」その言葉に誰もが耳を傾けた。

「そうだね……今回、我々の役は、あまり、演技に説明がましい部分がいらないってことかな。サブにせよ、徳さんにせよ、状況を説明してくれるガイドが他にいる。つまり、むしろ、深く考えずに、シンプルに演じる方向だろう。まあ、ぼくもリテイク要求されているわけだし……間違つてたら言つてくださいよ！」

最後の部分はガラス張りのブースの外に向けた言葉だ。音響監督が指でオーケイと示したから、それでいいのだろう。以降、Aパートのリテイク作業の間、ぼくはすごいものを体験した気がする。

役者たちが演じると、そこに「世界」があつた。キャラクターひとりひとりが、躍動<sup>(イ)</sup>していた。

キャラが躍動する世界は、ぼくたちがいるこの世界とは薄い膜を隔てた向こう側、想像の先にある。体を使って演じるのではなく、声だけを使うからこそだ。もしも、舞台俳優なら、その空間を変容させて違う世界を現出させる。しかし、声優がやっていることは似ていて、違う。

もちろん、収録ブースの中にいるのはぼくたち自身であつて、あくまで役者だ。椎野さんは腕をぐるぐる回し、平川先輩は鋭い動きでマイクの前に飛びだしては退き<sup>(ウ)</sup>、日向さんはロックスターのようなアクションをつけて、友坂さんは大きな体をやや前屈みに、大島啓吾はいつにもまして流れるようにマイクの前に入った。それぞれの動きが美しく、うっとりするほどだった。これは世界を創る現場。ここではないどこかに声の息吹を注ぎ、現実のものにする。

ああそうか。ぼくたち声の役者は、ここにいながら、あつちの世界に働きかける。「光あれ、声よ響け」と述べつつも、あくまでこっちにいる。だからこそ、自分であつて自分ではないキャラを創り、世界を成り立たせることができる。声優は、全身全霊で、言葉の魂を放つ者たちだ。

ぼくは、同じブースの中にいられることに感謝した。心底感謝した。

ああ、本当に凄<sup>すこ</sup>い。背筋<sup>せき</sup>が痺<sup>しび</sup>れる。

そして、リテイクが終わり、音響監督からオーケイサインが出た時、今度は、その感激<sup>A</sup>の思いが一気に暗転した。  
なぜって……。

前半は、みんなが、ぼくの演技に合わせてくれた。

しかし、後半、ぼくは、サブだけではなく、人間の役、それも名前を持った、重要キャラを演じる。つまり、ぼくも、前半の共演者たちと、同じことが要求される。ぼくが感激し、酔いしれた、あの研ぎ澄まされた演技の輪の中に入っていかねばならないのだ。

休憩時間、いったん控え室に戻ったが、いつもと雰囲気<sup>B</sup>がまったく違った。会話がな<sup>い</sup>。それぞれが、台本を取り出して険<sup>(E)</sup>しい表情で読み直していたり、三色ペンやマーカーを使い書き込みをしたり。ピリピリしているどころか、空気に本当に電流が流れているみたいだった。

コーヒーをカップに入れかけて、うっかりと指にかけてしまった。

あちっ、と声をあげても、誰も何も言わなかった。

いや、ちよつと間を置いて反応があった。

「おい、気を付けろよな」

「静かにお願いします」

平川先輩と椎野さんが、口々に言ったのだ。

こちらを見もせずに、ただ、目の前にある小さな障害物をひよいと取り除くみたいな、さりげない言い方だった。

体中から、邪魔すんな！ というオーラを発していた。

ああ、そうか！

ぼくは、悟った。

つまり……みんな、ぼくの責任なんだ。

サブの演技に合わせて、ほかのキャストが芝居を変える、というのが音響監督の方針だった。

逆にいえば、ぼくが主要キャストの芝居と馴染<sup>なじ</sup>みやすく演じていれば、こうはならなかった。当番回であることをいいことに、自分を強く押し出し過ぎていた。その結果、共演者たちに負担をかけている……。

ぼくは、いつも陽気な日向さんや、頼りがいのある友坂さんの姿を探した。あの二人なら、こんな時でも、普段通りかもしれないと、かすかな期待

を込めて。

しかし、いつものソファにいない！ 二人がブースに戻っていく背中が見えた。そして、防音扉を閉めてしまった。後半の芝居を、声を出して再検討するつもりなのだろう。

これじゃ控え室にもブースにもぼくの居場所はない。深呼吸しようにも、喉が詰まる。

ぼくは、こぼしたコーヒートをティッシュで拭き、「五分間、外の空気を吸ってきます」とスタジオを出た。後ろで、キヤスティング担当のお姉さんが、ちょっと慌(オ)てていたけれど、そそくさと靴をはいた。

スタジオは地階にある。

上の方は普通のマンションで看板もないから、表からは録音スタジオだとは分かりにくい。郵便受けにスタジオ名が書いてあるくらいだ。こんなところで、アニメを創っているなんて誰も思わないだろう。収録の日は絶対的な機密事項で、それさえきちんとしておけば、声優はわりと気楽に外を歩ける。

ただし、この日に限って、外に出てお日様の光を浴びて、スカッとした気分になろうという目論見は、見事にはずれた。

空はどす黒く、路面は濡ぬれていた。

それどころか、道路の低いところを激しく水が流れていた。かなり太い街路樹の枝が折れて、道路の片車線を塞いでいた。収録前には、誰もこんなことを言っていなかったから、この三十分か一時間のうちに激しい雨が降ったのだ。いわゆるゲリラ豪雨みたいなものだろう。

スタジオは外と切り離された空間だ。

中に入ると外の音は聞こえない。収録ブースの中ではなおさらだ。

猛烈な風雨の下にいながら、ぼくたちは気づくこともなく、ただ世界を創造することだけに熱中していた。嵐の中で、創造の繭の中において、別世界を創っていた。

さあ、ぼくもその中に戻らなければ。

自分に言い聞かせるのだが、動悸どうきがして動けなかった。指先が冷たいのも相変わらずだ。

泣き声が聞こえた。

甲高い声で、なにかを切実に訴えていた。

母親に手を引かれた小さな男の子が、引きずられるみたいに近づいてきた。

「ママ、ごろごろ、こわいよお」と足にしがみついている。

「今のうちに駅まで行けば、すぐにおうちだからね」と母親。  
でも、男の子は、駄々をこねるばかりだ。

「シヨコラも怖がつているからね。早く帰って、ぎゅーっ、してあげましょう。シヨコラは、おうちでひとりきりなのよ」  
あ、と思った。

シヨコラというのは、たぶん、犬だ。

母親が「ぎゅーっ」と言いながらした仕草から考えて、小型の室内犬。

ぼくは思わず、膝を折って、「くうーん」と犬の声を出した。

「ぼく、シヨコラ。早く帰ってきてほしいなあ。泣いてないで一緒に遊んで」

「ママ、おにいさんが、シヨコラ……」

男の子は混乱した様子で、ぼくと母親を交互に見た。

遠くから雷の音が聞こえた。また雨が降り始めるのかもしれない。

「急がれた方がいいと思います」と今度は人間の声で言った。

「ありがとうございます！ さあ、急ぎましょー！」

母親は、男の子の手を引き、足早に去っていった。

不審者すれすれというか、充分すぎるくらいに不審な言動だったけれど、早く駅までたどり着いてくれるといい。ぼくの声が、あの子に届いたのならば。

ぼくは、はっとして眼を細め、収録前に音響監督が手渡してくれた葉書が入っている胸ポケットに手を当てた。

そうだ、ぼくにはこれがある。

柴犬サブの演技を楽しみにしている子からのメッセージ。

たった三行だけ、

ぼくはしょうがく1ねんせいです。

さぶが、かわいくて、おもしろくて、すきです。

おうえん、しています。

なんだか胸にじーんと届く。

この子は、きつとこの回を楽しんでくれる。いや、楽しめる回にする。そして、新キャラの獅童春風のことでも好きになってもらう！  
強く念じたら、やつと迷いが薄らいだ。

その思いが、ぼくの心の拠り所だ。だから、あきらめちゃいけない、あきらめちゃいけない、あきらめたら、そこで試合終了だ。

スタジオの控え室に戻ると、さすがにみんな台本のチェックを終えたらしく、少しは会話が戻っていた。

ぼくは、平川先輩の前に出て、「先輩！」と呼びかけた。

「こんな痺れる収録は久しぶりだ！ さあ後半も踊ろうぜ！」と日向さんが小刻みにステップを踏んだ。

台本を持つ指先に温もり<sup>D</sup>、いや、熱を感じ、ぼくはふたたびマイクの前へ！

（川端裕人「声のお当番」オール讀物平成26年7月号による。本文に一部省略した箇所がある。）

（注1） 俯瞰——高いところから見下ろして眺めること。

（注2） ブース——仕切られた小部屋。ここでは音声を収録する狭いスタジオのこと。

（注3） キャスティング——演劇やドラマなどの配役をすること。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字の正しい読みを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は  ～ 。

(ア) 輪郭

- ⑤ ろんきゃく
- ④ りんかく
- ③ ろんこう
- ② りんこう
- ① わだち

(イ) 躍動

- ⑤ りつどう
- ④ れんどう
- ③ ゆうどう
- ② ようどう
- ① やくどう

(ウ) 退き

- ⑤ しりぞ(き)
- ④ かたむ(き)
- ③ うつむ(き)
- ② おの(き)
- ① とおの(き)

(エ) 険しい

- ⑤ うつとう(しい)
- ④ さび(しい)
- ③ かな(しい)
- ② けわ(しい)
- ① きび(しい)

(オ) 慌てて

- ⑤ あれは(てて)
- ④ あおりた(てて)
- ③ あわ(てて)
- ② あらだ(てて)
- ① おだ(てて)



問2 傍線部A その感激の思いが一気に暗転した とあるが、この時の「ぼく」の気持ちはどのようなものか。最も適当なものを、次の①～⑤の

うちから一つ選べ。解答番号は 6。

① 「ぼく」の演技を基本線にして「ぼく」を立ててくれた声優たちの演技に感動したが、自分のせいで再収録の負担をかけることになってしまったことを申し訳なく思っている。

② 「ぼく」の演技に合わせて「ぼく」のキャラを引き立ててくれた声優たちの演技に感動したが、今度は「ぼく」が主要キャラに合わせて引き立て役になることに不満を感じている。

③ 一回で監督の納得のいく演技を成し遂げる優れた技術や精神力をもつ他の声優たちに感動しつつも、午後の収録で駆け出しの自分が彼らと同じ水準の演技を求められることに納得できずにいる。

④ 別の世界を創り出しているような共演の声優たちの全身全霊を込めた演技に感動したが、午後の収録では自分にも彼らと同じ高い演技力が要求されていると思つて重圧を感じている。

⑤ 他の声優たちの非常に高い水準の演技の輪の中で自分も演技をしなければならぬということに不安を感じつつも、声優としてかけがえない経験ができることに興奮を隠せないでいる。

問3 傍線部B ピリピリしているどころか、空気に本当に電流が流れているみたいだった。 とあるが、これはどのようなことを表しているか。最も

適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

① 「ぼく」の感動とは別に、リテイクの原因を作った「ぼく」に対する共演者たちの厳しい批判が生み出した緊迫した空気を表している。

② リテイクを引き起こした駆け出しの「ぼく」に対して、よそよそしい態度を取る共演者たちへの「ぼく」の不愉快な心情を表している。

③ 監督からリテイクの指示を受けて、他の共演者たちが演技の再検討に感覚を研ぎ澄ませている控え室の張りつめた様子を表している。

④ 午後からの収録でベテランの声優たちと肩を並べて演技をすることになる緊張のため、「ぼく」の心拍が高まっている状態を表している。

⑤ 監督の指示に刺激を受けて、それまで気乗りのしなかった出演者全員がようやく真剣に演技に取り組み始めた状況を表している。

問4 傍線部C 指先が冷たい、傍線部D 指先に温もり、いや、熱を感じとあるが、この指先の感覚の変化は何を表しているかについて、クラスをいくつかの班に分け、それぞれの班で考察した。次のやり取りはある班の話合いの一部である。発言中の（ア）（イ）に入る語の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

Xさん 「傍線部Cの『指先が冷たい』というのはもちろん、単純に寒くて指先が冷たくなっている、というわけではないだろうけど……。」

Yさん 「そうだね。これはもちろん『ぼく』の心情を示すための表現だよね。」

Zさん 「『指先が冷たい』というのは、失望してやる気がなくなったということなのかなあ。」

Yさん 「いや失望というのはちよつと違うと思うよ。この指先の冷たさに触れているのは、後半の収録を控えたスタジオ内の雰囲気になんて耐えきれなくなつて外に出たときだよね。」

Zさん 「そうだけれど……。」

Yさん 「スタジオ内の雰囲気になんて耐えきれなかったから、居場所をなくしたような思いにとらわれてしまったんだと思う。自分でもどう動けばいいのかわからなくなつてしまった、そのことを『指先が冷たい』と表現したんじゃないのかな。」

Xさん 「じゃあ、傍線部Dで『指先に温もり、いや、熱を感じ』となつたのはどうして?」

Yさん 「スタジオの外に出た『ぼく』は小さな男の子とちよつとしたやりとりから、自分に宛てた小学生のファンの手紙のことを思い出す。それに目を通して行くうちに『ぼく』の演技を楽しみにしてくれる人々の期待を裏切つてはいけない、という思いから（ア）が薄れてゆく……。」

Zさん 「そうか。このままでは自分から『試合終了』という状況になつてしまう。『あきらめちゃいけない』と何度も自分自身に語りかけることで『ぼく』は午後の収録への（イ）が高まつてくる。そのときの心情の表れとして傍線部Dのような表現がなされているんだね。」

- |   |        |      |
|---|--------|------|
| ① | ア 悲しみ  | イ 緊張 |
| ② | ア 迷い   | イ 意欲 |
| ③ | ア 怒り   | イ 熱意 |
| ④ | ア 不安   | イ 動揺 |
| ⑤ | ア むなしさ | イ 野心 |

次の文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。

二頭のチンパンジーをリンセツした透明なパネル製のブースに入れ、ブースの間には小さな穴を開けておきます。片方のチンパンジーCには、手を伸ばしても届かない場所にジュースを置いておきます。もう一方のチンパンジーDにはジュースはなくて、代わりにステッキを置いておきます。Cがジュースに手を伸ばして、何とか取ろうとしているのをDはパネルゴシに見ていた場合、DはステッキをCに渡すかどうかという実験です。結果としてDはステッキを渡そうとはしません。Cがどれだけ必死に手を伸ばしても、Cの代わりにDの子どもが同じことをしても、Dは何もしようとしません。ところがCがブース間に開いた穴を通して、Dに「ステッキをくれ」と意思表示すると、Dは当然のようにステッキをCに渡すのです。つまりDは、この状況を理解していないからCを助けなかったのではなく、Cがジュースを飲みたくて必死なのだということをちゃんと理解していたことになります。

次に非常に有名な、チンパンジーが他者の心理を理解しているか、状況が読めているかの実験を紹介しましょう。チンパンジーは群れの中で序列がはっきりしていて、それが重要な意味を持っています。そこで序列が異なる二頭を別々の檻おびに入れておき、檻と檻の間にエサを二つ置いておきます。エサの片方は両方のチンパンジーから見える位置にありますが、もう片方は劣位のチンパンジーにだけ見えるようにしてあり、優位のチンパンジーはそこにエサがあることに気付いていません。さて二頭を同時に檻から出した時に、優位のチンパンジーは、自分から見えているエサの方に行くはずで、逆に劣位のチンパンジーは、どのような行動を取るでしょうか。優位の相手と同じエサを取り合っても、劣位の自分は食べることはできないはずです。ならば自分だけ見えているエサの方に行くのではないのでしょうか。

これは「競争的知能」と呼ばれるもので、相手が何を考えているかを読みとって、競争条件で自分が勝つことをするという知能は、動物には備わっているのです。

一方でヒトの子どもは、競争的な知能ではなく、協力的知能Bがとても小さい頃から発達しています。これはハンガリーでの研究ですが、コンピュータの画面上に山を描いて、イラストの丸が山に上ろうとしている絵を子どもに見せます。そこに三角形が出てきて、丸を押し上げてあげるように動き、頂上まで行くことができました。次に四角形が出てきて、逆に丸を押し戻そうとするアニメを見せます。この二つを見せた後で、子どもに三角形と四角形の積み木を見せて、「どっちが好き?」と聞くと、「いじわるな四角形は嫌い」と答え、やさしい三角形を手に取ります。このように相手が何を欲しているか、相手が何をしたいがっているのか、相手に何をしてあげたら喜ぶのかについて、ヒトは子どもの頃からものすごく敏感です。

そこで先ほどの競争的知能の実験をしたグループが、ヒトの二歳の幼児、チンパンジーとオランウータンについて、同じ知能テストをしました。す

ると物理的な現象についてのテストでは全員同じような得点でしたが、相手が何をしたがって、何をしてあげると喜ぶのか、相手は何を見ていて、何に気付いているかなど、社会的に他者を慮おもんばかることの元になる心の理解、いわば共感する能力については、チンパンジーとオランウータンは二歳の幼児に遠く及びませんでした。

では、ヒトとヒトが互いに共感し合うことで、何が生まれるでしょうか。赤ちゃんとお母さんのそばにイヌがいるとします。赤ちゃんがイヌを指差して、「あーあー」とか「ワンワン」などと言うことがありますね。それを見たお母さんも赤ちゃんに「そうね、ワンワンね」と答えます。これが言語の始まりであり、人間の子どもは生後まもなく、こういう行動をします。さて、この時に赤ちゃんの頭の中で何が起こっているかというところ、イヌの心的なイメージが生まれているはずで、そしてお母さんは「ワンワン」と言っている赤ちゃんを見て、「赤ちゃんがイヌを見ている」という心的イメージを持ちます。これに加えて、赤ちゃんの方でも「お母さんがワンワンを見ている」という心的イメージを持つようになります。赤ちゃんの頭の中のイメージと、お母さんの頭の中のイメージは決してつかみとることができないため、同じことを思っているというホシヨウ(ウ)はどこにもありません。ある意味、幻想かもしれません。しかしわれわれヒトは、お互いに眼を見交わしたり、表情を読んだり、指を差したり、言葉を発することで、お互いの心的イメージが同じであるという幻想を共有することで、社会をうまく回しているわけです。

ところがチンパンジーはこうした幻想を持っていないので、自分の心的イメージと同じものを、相手が共有してくれていることが分からないのだと思います。だから自分が必死にジューズを取ろうとしているのに、ステッキを渡してくれない相手に怒ることもないし、相手が自分に助けを求めているとは思わないので、要求されない限りステッキを渡すこともないのです。

しかしヒトは、まだ言葉を発することができない赤ちゃんの頃から、さまざま手段を使って、相手との間で互いの心的イメージを合致させようとしています。私はこれが共感の基礎であり、言語の基礎であり、みんなが一致協力して何かをする基礎であり、社会という枠組みの基礎でもあると思います。これこそが、ヒトらしさの最大の特徴ではないでしょうか。また同時にゲーム・シミュレーションで用いられる単純なプログラムとも決定的に異なっている点です。ですから従来のゲーム理論(注1)でのアプローチでは、ヒトが進化の中で、現在のような心理メカニズムを持つに至った過程を解き明かすことは難しいと思います。

先にも述べたように、他者の心はつかみとって見ることはできず、あくまでも推定することしかできません。だからこそ、ヒトは、誤解する(される)、感情のすれ違い、あなたはわかってくれない(あの人はわからない)などということに、これほどセンサイ(オ)で、敏感で、シユウチャク(オ)するのです。

(長谷川眞理子『貢献する心』工作舎による。)

(注1) ゲーム理論——利害が対立、交錯する関係者の意思決定を解明するために用いられる数理的な分析方法。

問1 傍線部(ア)～(オ)に当たる漢字を、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は  。

(ア)  リンセツ

- ⑤ ④ ③ ② ①  
鈴 厘 隣 倫 林

(エ)  センサイ

- ⑤ ④ ③ ② ①  
染 腺 鮮 旋 緘

(イ)  ゴし

- ⑤ ④ ③ ② ①  
過 越 来 通 透

(オ)  シユウチヤク

- ⑤ ④ ③ ② ①  
宗 執 祝 就 囚

(ウ)  ホシヨウ

- ⑤ ④ ③ ② ①  
証 訟 償 賞 涉

問2 空欄Aに当てはまる文として、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① だが、劣位のチンパンジーは優位の相手と戦うことを選びました。
- ② ところが、劣位のチンパンジーは優位の相手と同じエサを取りに行きました。
- ③ 結果から言うと、劣位のチンパンジーはまったく動きませんでした。
- ④ そこで、劣位のチンパンジーは優位の相手にエサを渡しました。
- ⑤ 実際、劣位のチンパンジーはそのように動きませんでした。

問3 傍線部B 協力的知能 とあるが、それはどういうものか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 「やさしい三角形」「いじわるな四角形」のように、相手の性格と形状を結びつけて目の前にいる相手を理解しようとする能力。
- ② 相手が何をしたがって、何をあげると喜ぶのか、相手は何を見て、何に気付いているかなど、他者に対して共感する能力。
- ③ 赤ちゃんが目の前にいるイヌを「ワンワン」と呼ぶように、対象の音や動きを認識して対象に適した名前をつける能力。
- ④ 相手が何を考えていて、どのようなことに興味を示しているのかなど、他者の行動を読み取ることによって自分が勝つことを選択する能力。
- ⑤ 自分の心的イメージを相手が共有してくれていなくても、むやみに怒ったりせずに、相手から要求されれば手を貸すことのできる能力。

問4 傍線部C ヒトとヒトが互いに共感し合うことで、何が生まれるでしょうか。とあるが、何が生まれるのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 相手の言葉を正確に理解しようとするので、誤解やすれ違いのまったくない心の交流が生まれる。
- ② 心的イメージを互いに合わせることで、言語や相互協力、社会というものの基礎になるものが生まれる。
- ③ 他者の心理を理解し状況を読みとることで、競争条件で自分が勝つ方法を見つける能力が生まれる。
- ④ 他者の心理やその場の状況を読み取ることで、次の動きをシミュレーションする力が生まれる。
- ⑤ 相手が自分のことをもっとわかってくれるはずだと思ひ込むことで、感情のすれ違いが生まれる。

問5 この文章の説明の仕方や内容について述べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① ヒトと他の動物に対し同一の実験を繰り返し行い、そこから得られたデータを比較し、ヒトと他の動物との違いについて分析することで、ヒトの進化の過程を明らかにしている。
- ② 赤ちゃんとお母さんに対して言語に関する実験を行い、ヒトは動物とは違って言語をもっていることに最大の特徴があることを説明し、その言語によって今日に至るまで社会を発展させてきたと述べている。
- ③ 数種類の実験結果の紹介を通して、ヒトと他の動物との違いについて述べ、ヒトは共感する能力が発達していることを導き出し、それがヒトらしさの最大の特徴であることを指摘している。
- ④ 他者に対する心理について、ヒトと他の動物に対しそれぞれ実験を行い、「競争的知能」がすべての動物に共通のものであることを導き出し、それが感情のすれ違いの原因であるということを指摘している。
- ⑤ ヒトと動物の心理メカニズムの過程について、さまざまな実験を通して考察し、相手が何を考えているかということ認識できる点ではヒトと動物の違いはほとんどないということの説明している。





次の文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。

(一) 商人の藤井元徳は、仙人に関する本を読み、仙人にあこがれを抱いていた。(一)

「仙人の身持は、第一世帯に物がいらす。好色を離れ、美食をくらははず、世路(注1)に気を費さず。松の葉などの粗食(そじき)を食ひ、正月(しょうげつ)着物も木の葉のつづれにてすまし、髭(ひげ)・月代(さかやき)もそらざれば、髪結(かみゆひ)賃をいださず。行きたい所へ、物(もの)のいらぬ雲に乗つて飛行(ひきやう)する事自由なれば、仙術を行うて楽しみにせん」と、ふと思ひ込まれしを、手代(てだい)のうち(注3)に、目の鞆(たぶ)の抜けたる、油断(ゆだん)のならぬ男が聞きつけ、「幸ひの事」と、まかりいでて申しけるは、「旦那には、かねて仙術を学ばんとおぼし召し立つ由、はばかりながら御自身、千年万年御工夫なされたればとて、何とておひとりその術を知り得たまはん。万の事もその通りなれども、別して師匠なしにこの道は行じがたし。昔もこの道に心を寄せて学ばれし人々、皆皆深山幽谷に分け入りて、それぞれの師匠を取り、または秘書(注5)を得てよく見きはめて、仙人になりたる衆中、日本にも多く見えたり」(中略)

(二) うまく乗せられた元徳は百両払つて手代の男から「秘書」と言われた物を借り受け、仙人修行に専念するといつて自宅にこもり三年余りが過ぎた。(二)

「われも仙術の試みに」とて、ある時身を清め、秋の夜の月曇りなく、堺(注7)の南北一目に見渡し、三階蔵の屋根へ継ぎ梯子(ぼじご)さして、七十に余りて達者にもない足をつま立て、やうやう屋根へ上りて、住吉(注9)の方(むか)に向ひ、観念(くわんねん)の眼(まなこ)をふさぎ、「一代の大願(だいがん)この時なり。今志す所は生駒山(なまこ)までの飛行ぞ」と、両の手をさしのべて飛びければ、棒檜(ぼうか)の枝をこすり、捨石(すていし)のただ中に落ちかかりて、そのまま腰を抜かし、「やれ仙術が生煮えにて、まだよく熟めもせぬに飛んで、腰骨を打ち折つたわ。こりや目がまふわ。出合へ出合へ」と、呼ばはる声に、家内の者ども驚き、手燭(てしよく)ともしつれ庭にいで、「これはこれは」と騒ぎ立ち、母屋へ人を走らせ、「医者よ。針立(はりたて)よ。へうたんの黒葉(くろは)よ」と、隠居と母屋の大騒ぎ。町内までも家々に行燈(あんどん)いだして、「元徳仙人が軽業(かろわざ)のしそこなひなされて、腰の骨が折れたげな」と、堺中にこの沙汰(さた)ひろまり、それより大坂(注16)に伝へて、「これは変つたせんさく」と、今に話の種とはなりぬ。

(『浮世草子集』による。)

- (注1) 世路——世渡りの道。
- (注2) 月代——男性がまげを結う時、額から頭にかけて丸く剃る部分。
- (注3) 手代——商家の使用人。
- (注4) 目の鞆の抜けたる——「抜け目のない」の意。
- (注5) 秘書——秘蔵の書物。
- (注6) 仙人になりたる衆中——仙人になった人たち。
- (注7) 堺——現在の大阪府堺市。
- (注8) 継ぎ梯子——梯子を継ぎ合わせたもの。
- (注9) 住吉——堺より北方にある住吉神社の方向。
- (注10) 観念の眼をふさぎ——心を静めて念ずること。
- (注11) 生駒山——現在の大阪府と奈良県の境にある山。
- (注12) 棒檜——檜の木。
- (注13) 捨石——庭のところどころにすえて趣を添える石。
- (注14) 手燭——ろうそくをのせるための柄の付いた小さな台。
- (注15) 針立よ。へうたんの黒薬よ——「針立」は鍼灸師。「へうたんの黒薬」は落馬した際に使う塗り薬。
- (注16) 大坂——現在の大阪府大阪市。

問1 傍線部A 物のいらぬ雲 の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 生活するのに必要のない雲
- ② 乗るのに費用のかからない雲
- ③ 浮かぶのに特別な力を使わない雲
- ④ ありふれていて特徴のない雲
- ⑤ 仙人以外には見えない雲

問2 傍線部B 幸ひの事 とあるが、男はなぜそのように思ったのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

19。

- ① 仙術を使って一人でも多くの人を助けることができるから。
- ② 仙術で元徳の役に立てば店を立て直すことができるから。
- ③ 仙術について知っていることを店の人に自慢できるから。
- ④ 仙術のことで元徳から金をだまし取ることができるから。
- ⑤ 仙術に夢中になる元徳の目を覚ますことができるから。

問3 傍線部C 何とておひとりその術を知り得たまはん の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

20。

- ① どうして独学でその術を会得なさることができるでしょう。
- ② 何を使えば一人でその術を利用なさることができるのでしょうか。
- ③ 何があっても自力でその術を身につけることができるのでしょうか。
- ④ どうか私にだけその術を教えてはいただけませんか。
- ⑤ どうにかして人知れずその術を知りたいと思っていらいしたのですね。

問4 傍線部D やれ仙術が生煮えにて とあるが、ここからどのようなことがわかるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 21。

- ① 屋根に上がった空を飛ぶのが怖くなったので、適当な理由をつけてごまかそうとしていること。
- ② 自分の練習不足が原因であると認められず、失敗は菓の効き目が弱かったとして譲らないこと。
- ③ 仙術が実は嘘であることをいまだに理解せず、失敗は食事のせいだと決めつけていること。
- ④ 自分のいない間に店の経営が悪化したのを知って、責任を手代の男に押しつけようとしていること。
- ⑤ 手代の男からだまされたことにまだ気付かず、失敗は自分の修行不足だと信じて疑わないこと。

問5 この文章の表現の特徴について述べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 会話を利用して登場人物の心情を明確に表し、町人の姿を平易な言葉で生き生きと描き出している。
- ② 擬声語によって物語に臨場感を出し、緊迫した雰囲気をつンポの良いやりとりで強調している。
- ③ 和歌の修辭を使って格調高い雰囲気を作り、貴族社会へのあこがれを流麗な文体で表現している。
- ④ 漢語を用いて作者の教養の高さを示し、異国の文化を簡潔で力強い表現で読者に解説している。
- ⑤ 伝聞表現を多用して物語の虚構性を明示し、現実の社会問題を間接的な言い回しで批判している。

次のⅠ・Ⅱ・Ⅲの文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。ⅡはⅠの続きで、敬姜が息子である文伯にかけた言葉の内容を現代語訳したものであり、ⅢはⅡに続く文章である。

Ⅰ 文伯<sup>いデ</sup>出<sup>ビテ</sup>学<sup>ス</sup>而<sup>ス</sup>還<sup>ス</sup>帰<sup>ス</sup>。敬姜<sup>そはメテ</sup>側<sup>レ</sup>目<sup>ヲ</sup>而<sup>ミルニ</sup>盼<sup>レ</sup>之<sup>ル</sup>、見<sup>ル</sup>其<sup>ソノ</sup>友<sup>ノ</sup>上<sup>レ</sup>堂<sup>ニ</sup>。從<sup>ヒ</sup>後<sup>シリヘニ</sup>、階<sup>ノ</sup>降<sup>リ</sup>而<sup>シテ</sup>卻<sup>ク</sup>。<sup>(注1)</sup>

行<sup>カウシ</sup>、奉<sup>ジテ</sup>劍<sup>ヲ</sup>而<sup>シ</sup>正<sup>シ</sup>履<sup>ハキモノヲ</sup>、若<sup>シ</sup>事<sup>ニ</sup>父<sup>ノ</sup>兄<sup>ニ</sup>。文伯<sup>ラ</sup>自<sup>ラ</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>成人<sup>ト</sup>矣<sup>ト</sup>。

Ⅱ 敬姜は、文伯を呼び、その様子を責めてこう言った。「むかし、武王という王様が朝の政務を終えられたとき、履き物のひもが切れたのを結び直されようとしたことがあります。左右を見まわしても、結ばせてよい者がおりません。うつむいて自分で結び直されたのです。だから王道を成し遂げられたのです。斉国の桓公という王様は①対等に座って談じ合う友人が三人、ご意見番の臣下が五人、②日々過ちを挙げて指摘してくれる方が三十人もおられました。だから覇業を成し遂げられたのです。周公という王様は次々と押しかけ面会を求める客に応対なさるために、一度の食事中に三度口にしたものを吐きだして食事を中断し、一度の洗髪の途中にも三度髪を握って水を拭いて洗髪を中断なさいました。また、贈り物を持って貧しい村里・狭い路地の奥をお訪ねになり、そこで③会って意見を求められる方が七十人あまりもおられたのです。だから周の王室を長くお伝えになれたのです。かの二聖人・一賢者は、みな④覇者・王者となつた方々でいらつしやる。それなのにこれほどに人に対し謙虚にふるまわれたのです。その付き合われた方もみなご自分以上の人物です。だからご自分でも気づかないうちに日々、徳を高めることができたのです。しかし今のあなたは年若く、地位も低いのに、付き合う者は、みな⑤あなたに従いつかえる者ばかりです。あなたが徳のある人間になれずに終わるのは、やはり明らかです。」

Ⅲ 文伯<sup>すなはチ</sup>乃<sup>ス</sup>謝<sup>ス</sup>罪<sup>ヲ</sup>。於<sup>レ</sup>是<sup>ニ</sup>、乃<sup>チ</sup>扞<sup>ニ</sup>嚴<sup>ニ</sup>師<sup>ヲ</sup>・賢<sup>ニ</sup>友<sup>ヲ</sup>而<sup>シテ</sup>事<sup>フ</sup>之<sup>ニ</sup>。所<sup>ニ</sup>与<sup>スル</sup>遊<sup>スル</sup>處<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>、皆<sup>ク</sup>黄<sup>ク</sup>耄<sup>ハ</sup>・倪<sup>ゲ</sup>齒<sup>シ</sup>也<sup>ナリ</sup>。文伯<sup>キジンヲ</sup>引<sup>レ</sup>枉<sup>レ</sup>攘<sup>レ</sup>捲<sup>ケンシテ</sup>、而<sup>シテ</sup>親<sup>ミツカラ</sup>饋<sup>カレ</sup>之<sup>ニ</sup>。敬姜<sup>イハク</sup>曰<sup>ハ</sup>、「子<sup>ハ</sup>成<sup>ル</sup>人<sup>ナリト</sup>矣<sup>ト</sup>。」<sup>(注2)</sup>

也<sup>ナリ</sup>。文伯<sup>キジンヲ</sup>引<sup>レ</sup>枉<sup>レ</sup>攘<sup>レ</sup>捲<sup>ケンシテ</sup>、而<sup>シテ</sup>親<sup>ミツカラ</sup>饋<sup>カレ</sup>之<sup>ニ</sup>。敬姜<sup>イハク</sup>曰<sup>ハ</sup>、「子<sup>ハ</sup>成<sup>ル</sup>人<sup>ナリト</sup>矣<sup>ト</sup>。」<sup>(注3)</sup>

也<sup>ナリ</sup>。文伯<sup>キジンヲ</sup>引<sup>レ</sup>枉<sup>レ</sup>攘<sup>レ</sup>捲<sup>ケンシテ</sup>、而<sup>シテ</sup>親<sup>ミツカラ</sup>饋<sup>カレ</sup>之<sup>ニ</sup>。敬姜<sup>イハク</sup>曰<sup>ハ</sup>、「子<sup>ハ</sup>成<sup>ル</sup>人<sup>ナリト</sup>矣<sup>ト</sup>。」<sup>(注4)</sup>

(『列女伝』による。)

(注1) 卻行——道を譲る。

(注2) 黄耄・倪齒——老人のこと。

(注3) 引衽攘捲——衣服の袖をまくりあげて。

(注4) 饋——食事の世話をする。

問1 傍線部A 其友とあるが、この人物の説明として最も適当なものを、IIの文中の波線部①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

23。

① 対等に座って談じ合う友人

② 日々過ちを挙げて指摘してくれる方

③ 会って意見を求められる方

④ 覇者・王者となった方々

⑤ あなたに従いつかえる者

問2 傍線部B 若事父兄の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

24。

① 父や兄と争うようにつかえている。

② 父や兄につかえる理由はないようだ。

③ 父や兄につかえるようにふるまっている。

④ 父や兄につかえるのもしかたないようだ。

⑤ 父や兄には知られないようにつかえている。

問3 傍線部C 文伯乃謝罪。とあるが、文伯はなぜ謝罪したのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 敬姜から先人の逸話を聞いて、成功する人間は思いあがることなくふるまっていたことが分かり、自分の態度の過ちに気づいたから。
- ② 敬姜から先祖の偉業を教えられたことで、友人との交際にかまけていない時ではないことが分かり、自分の行動の軽率さに気づいたから。
- ③ 敬姜から先人たちの成功の様子を聞いて、学問を完成させるにはどうしたらよいか分かり、自分の態度を改める必要性に気づいたから。
- ④ 敬姜から先祖の優れた行動を聞いて、敬姜が自分のことを同様に育てようとしていることが分かり、敬姜に反抗したことを後悔したから。
- ⑤ 敬姜から先人をたとえ話にして忠告されたことで、自分の友人たちの愚かさが分かり、敬姜の人を見る目の鋭さに感心したから。

問4 傍線部D 文伯引衽攘捲、而親饋之。とあるが、文伯はこれらの行動をとることで何をしようとしたのか。その内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① 老人と交際して彼らの世話をすることで、今までの非礼を反省する気持ちを示して、罪を償おうとした。
- ② 老人と交際して彼らの世話をすることで、周りの人間を尊重する気持ちを態度に表して、徳を積もうとした。
- ③ 老人と交際して彼らの世話をすることで、家族を大切にすることが行動に表して、敬姜を喜ばせようとした。
- ④ 老人と交際して彼らの世話をすることで、目上の人間への忠誠心を行動で示して、主君に認められようとした。
- ⑤ 老人と交際して彼らの世話をすることで、先人たちから知恵を授かって、同年代の友人たちに差をつけようとした。

問5 二重傍線部 a・b 成人 とあるが、それぞれについての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

27。

- ① aは、文伯が、父や兄よりも優れた人物になることができたと自負の気持ちを持ったということで、bは、敬姜が、文伯の誤りを正すことができたことで自分の子育てが完成したと考えたということである。
- ② aは、文伯が、誰もが高く評価するような大人物になりたいと考えたということで、bは、敬姜が、心を入れ替えて別人のようなふるまいをしている文伯のことを立派な大人になったと評価したということである。
- ③ aは、文伯が、周囲の人間が自分にへりくだる様子を見て自分のことを一人前の人間だと考えたということで、bは、敬姜が、忠告を聞き入れて行動を改めることができた文伯のことを一人前になったと認めたということである。
- ④ aは、文伯が、学問に励んできたことで行動に品格が備わったことを喜んだということで、bは、敬姜が、師の教えに従って正しいふるまいを身に付けた文伯を見て、良い師匠につくことの大切さを再認識したということである。
- ⑤ aは、文伯が、自分が周りから大切にされるために正しい行動をとっていることに満足しているということで、bは、敬姜が、先祖の教えに従って常に自分の行動を律している文伯のことを大人物になったと考えたということである。



